
環境問題と幸福

枝廣 淳子
Junko Edahiro

枝廣と申します。ブータンのGNHには以前から大きなインスピレーションと勇気を与えてもらっています。ブータンでGNHの国際会議が開催されたとき、私も参加させていただいて、ダショー氏ともお目にかかりました。今回、このように日本でまたご一緒できますことをとてもうれしく思っています。

私に与えられたお題は、「環境問題と幸福」ということですので、さっそく話に入っていこうと思います。環境をめぐる状況で、いま私たちはどのような時代に突入しつつあるのかということをおと皆さんと一緒に簡単におさらいしようと思います。環境問題というと、日本では温暖化を思いうかべる方が多いのではないかと思います。いまから、1950年から2100年まで、150年間の温暖化の温度変化のシミュレーションをお見せしようと思います。

いま手を打たずに、これまで通りに進んでいくと世界はどうなるかを見ていただきました。このような世界にしないために、私たち一人一人が様々な立場でいろいろ取り組んでいるわけです。

ただ、私たちが直面している問題は温暖化だけではありません。ピークオイルという言葉が聞かれたことはあるでしょうか。これは石油の生産量がピークに達して、そのあと減っていくタイミングのことです。石油の需要は、ずっと一貫して伸び続けています。供給量はどのようでしょうか。石油ショックなどをのぞけば、だいたいこれまで需要にあわせて供給してきたことが分かります。ところが今後、需要は同じように増えるのに、供給量はどこかの時点でピークに達して減っていく。これが世界の地質学者、研究所のほとんどの見方です。では、このピークオイルはいつ来るのか。いま世界で20～30の研究所、研究者が予測を発表しています。もうすでに来てしまったという人もいれば30年後だと言っている研究所もありますが、平均値を取るとおよそ2012年～2014年になります。ピークオイルがくると、増える需要に供給が追いつきませんから価格が上がっていく。これがエネルギー自給率4パーセントという日本にとって、極めて大きな問題になります。日本はこれまで化石エネルギーを輸入するのにどれぐらいお金を使ってきたか。1998年には5兆円だったのに、10年後の2008年には23兆に増えています。この10年で増えたうちのほとんどはエネルギーの価格上昇によるものです。かつて1バレル15ドル～20ドルでしたが、いまは40ドル、50ドル、60ドルとなっています。この先どうなるか。日本の経産省も、このあと2倍、3倍になっていくだろうと予測しています。日本はすでに23兆円を海外に払っていますが、いまの財政状況で40兆、60兆というお金を払えるのでしょうか。

そしてもう一つの大きな環境問題が生物多様性です。いままさに名古屋で生物多様性の提案国会議が開かれています。ぜひ考えていただきたいのは、どうしていまこんなに次々といろんな環境問題が起こっているのだろうかということです。まるでモグラたたきみたいに、オゾン層の問題、温暖化、次は生物多様性と、環境問題がどんどん出てきます。そのたびにオゾン層や生物多様性という

モグラを叩きにしているけれど、おそらくそれではうまくいかないのではないか。つまり、次々とモグラを産みだしているモグラたたきの台そのものの構造を考えて、そこに切り込んでいかないと問題が解決しないのではないかと思います。

私は、この構造は極めてシンプルだと思っています。そもそもの前提として、地球の大きさは決まっていて、変わらないということがあります。46億年前に地球ができてから、地球は1ミリだって大きくなっていません。太陽光線だけは外から入ってくるけれど、あとは地球のなかで循環しているだけです。水もそうですよね。大きさが変わらない地球の上で、人間の影響だけがどんどん大きくなってきた。かつて、人間は数も少なかったし、できることも限られていました。木を切るといっても斧で切る。せいぜい1日何本かですね。水を汲むといっても、せいぜい家畜の力を使うくらいなのでそんなにたくさん汲めません。ところが科学技術が発達するにつれて、地球に対する私たち人間の影響はどんどん大きくなってきました。実はいま地球1個分以上に私たちの影響は大きくなっています。これがエコロジカルフットプリント、つまり、私たち人間の活動を支えるのに地球はいくつ必要なのかという指標です。計算によっていくつかの数字があって私の持っている資料では1.4ですが、いずれにしても1を超えています。この状態が続くことはありえないので、持続可能ではありません。地球は1個しかないから、必ず1に戻そうとする力はたたりきます。1から離れれば離れるほど、私たちが活動を増やせば増やすほど、戻そうとする力は大きくなります。この1に戻そうとする力が実は温暖化であり、生物多様性の崩壊であり、森林の消失であり、サンゴ礁の危機なのだとは私は思っています。つまり温暖化も生物多様性も問題だと言いますが、それは問題ではなくて、症状の一つにすぎないということです。根源的な問題は、大きさが決まっている地球の上で無限の成長を目指してきた、目指しているということです。地球が支えられる以上になっても、まだ成長しようとしている、これが問題だということです。

このギャップを私たちはどのように乗り越えようとしてきたのか。デカップリングという考え方があります。これは望ましい、増やしたいものと、増やしたくないものと分けましょうという考えです。これまで経済成長するためには、たくさんの資源やエネルギーを使って、CO₂もたくさん出しました。これらはカップリング、つまり二つが手に手を取っていたわけです。しかし、それを分けることができないうか。GDPが増えても、資源、エネルギーの消費量は増えない、CO₂排出量は増えないようになればいいのではないかと考えていたのです。これがデカップリングという考え方です。これまでは技術開発や技術革新を通してデカップリングが試みられてきました。例えば、資源生産性やエネルギー効率を上げるなどです。GDPを生み出すのに必要な資源やエネルギーを減らせば、経済成長を続けられるのではないかと考えていたのです。これは、実際に先進国をはじめとした各国が取り組んできたことです。フランス、ドイツ、スウェーデン、ヨーロッパの例をみてみましょう。この三ヶ国はいつてみればデカップリングができています。GDPは増えているのに、CO₂は減らしていますから。さて、日本はどうか。日本はまだ十分デカップリングができていません。GDPが伸びるとCO₂がまだ増える、そういう構造になっています。

これまで技術的な力でデカップリングを進めようとしてきたのですが、それだけでは無理だろうと気づきはじめています。つまり、いくら資源効率やNP効率を上げててもゼロにはなりません。どんなに効率が良くなっても、元が増える限り絶対量は増えていきます。だとしたら、効率改善や効率アップだけでは間に合わなくなるし、すでに間に合っていない。ということで、私は二つ目

のデカップリングが必要なのだらうと思っています。それがまさにブータンがやってきたことですが、GDPと幸せを切り離すということです。私たちは幸せを求めて生きているわけでGDPが欲しいわけではない。これまではGDPが増えれば幸せになるのだらうと思っていたから、GDPを増やすということを社会の目標にしていました。だけど、GDPが増えなくても幸せは増えるのではないか。

これは面白いマンガになっています。交通事故が起こって何が起きたんですかと聞いている人に警察官が「GDPが1万5千ドル増えました」と答えています。実際、交通事故が起こるとGDPは増えます。救急車が走るし、おまわりさんは忙しいし、病院では薬が必要です。これは全部GDPを増やします。いまのGDPというのは、交通事故が起これば起これるほど、環境破壊が起これば起これるほど、そして家庭内暴力が起これば起これるほど増えてしまう。このままGDPだけをはかっているのでしょうか。

先ほど、ダショー氏もオルタナティブインディケーターズ、GDPではない新しい指標という話をされていました。その一つが、GPIという考え方です。GDPから幸せにつながっていないものを引いて、GPIに入っていないけれども幸せをつくりだしているものを足します。このGPIという指標は、日本を含め、数十カ国で計算されています。どの国もだいたい同じ傾向で、あるところまではGDPと幸せの指標は手に手を取って増えていきます。けどある時点を超えると、GDPが増えても幸せは増えなくなっていく。日本のグラフでも同じことを示しています。一人あたりのGDPが増えても、幸せを感じて満足しているという人の割合が減っている。こういった状況でGDPを増やすという政策をとり続けていいのだらうかということで、GDP以外で社会や経済の進歩をはかるための指標がこれまで考えられてきました。ブータンのGNHは指標化が進んでいますが、これも大きな動きの一つです。ブータンのGNHが出たときに、これはアジアの小さい国だからできるんだという見方も世界にはありました。しかしこの2年ほど、先進国が同じような道を歩み始めています。フランスではサルコジ大統領がノーベル経済学賞をとった学者を集めて、本当の進歩や豊かさをはかるということを諮問し、GDPに替わる指標づくりの提案をまとめたサルコジ報告という報告書が出されました。イギリスでは、イギリス政府の一つの委員会が“Prosperity without growth”（成長なき繁栄）というレポートを出しています。右肩上がりの成長を前提としないイギリスの繁栄、幸せはどうやってつくるべきかというレポートです。こういう動きがだんだん世界の主流になってきています。

ここでぜひ考えていただきたいことがあります。このピラミッドはハーマンデイリーという経済学者が提示した考え方のフレームワークですが、まず一番基本にあるのが自然資本です。生物多様性、水、きれいな空気、そういう自然資本が土台にあります。それらの自然資本をもとに、私たちはいろいろなものをつくりだします。例えば、工場をつくったり、いろいろな社会資本をつくりまします。私たちはこれまでこの中間部分の経済効率を一所懸命向上させてきたわけですが、どれだけのインプットを使って、どれだけのアウトプットをつくるかということで、効率というのをはかってきた。それがどれくらい自然資本に対して影響を与えているかは見てこなかったし、どれくらいの幸福を生み出しているかも見てこなかった。私たちが経済活動をするのは、単にものをつくるためだけではありません。それが目的ではなく、目的はもっと高い所にあります。それが幸せということです。本当に大切なものをつくりだす、そのために自然資本を使っているわけですが、しかし、私たちは、ピラミッドの真ん中しか見ていません。政治も経済も真ん中しか見ていません。大事なものは、

自然資本をどれだけ効率的、効果的に幸せに転換することができるか。ピラミッドの一番下から一番上までの効率を見なくてはいけないということです。そのような考え方をしていくと、私たちがこれまで考えてきた経済というのは多分、特に先進国では狭かったのだらうと思います。一番下にあるのが自然資本です。自然から何かを取り出して、それを使って一番上にあるハピネス、幸せをつくりだす。これが本当の意味での経済だとすると、いまの私たちの経済には、いわゆるお金を介した、GDPではかされるような経済、これしか存在しないかのように思っていた。だけど、実はそうではない。そんな経済を介さなくても、自然からそのまま幸せを得ることだってできます。もしくは、お金を介さないお裾分けとか、物々交換とか、そんなことだってできるわけです。ブータンに行ったときに、会議のあと2日、3日郊外をまわらせていただいたのですが、ブータンの経済はこのPROFESSIONAL ECONOMYといわれているGDPではかされる部分よりも、直接自然から得る、もしくはコミュニティを通じてお金を介さないで得る部分の経済がとても発達しているのだということを実感しました。

ブータンだけではありません。皆さんは日本の食料自給率が危機的な低さだということをご存じだと思います。40パーセントしかありませんね。しかし、福井県では、県民が食べているものに占める県産食材の自給率が60パーセントに達しています。その調査結果を見ると、まず家庭菜園を持っていて、買って来たりするのではなくて、自分で直接畑から収穫する、それが18パーセントくらいあります。それだけではなくて、福井の県産自給率が高いのはお裾分けがとても盛んなことも影響しています。お裾分けでいただく食材が11パーセントもある。ここにきてやっと、これまでばらばらだった環境と経済とが、もしくは経済成長と幸せとが、同じ土俵で話し合われるようになってきた。

環境だけではなく、根本的な原因である経済成長、そして私たちの幸せ。それが一つの土俵で話し合われるようになってきた。その意味でもブータンのGNHが非常に大きなインスピレーションを私たちに与えてきてくれたと思いますし、ここからが本番だなと思っています。ありがとうございました。